

分類	主な意見の概要	事業者の見解
陸上動物 (つづき)	<p>・満潮時にシギ・チドリ類はマングローブ林など陸域に移動すると思われるが、それについての情報はなく、影響も評価されていない。</p>	<p>海浜部における鳥類調査としては、平成13年度に海浜部において4定点で4季調査、平成15年に海浜部においてラインセンサス調査を夏季に行いました。</p> <p>改変区域内にはマングローブ林はなく、また改変区域内でのシギチドリ類の確認は数個体から十数個体程度と非常に少なく、土地改変による影響はほとんどないものと考えています。</p>
	<p>・ズグロミゾゴイおよびリュウキュウツミについては、営巣の確認だけでなく、つがい形成期や求愛期も含めて評価すべきである。</p>	<p>航空障害灯の工事については、リュウキュウツミ及びズグロミゾゴイのつがい形成期なども考慮し、ヒナの巣立ちから次の繁殖シーズンが始まる前に工事を終了することにより繁殖行動への影響の低減を図ってまいります。事業実施区域のズグロミゾゴイについては、繁殖期には営巣箇所周辺を避けて工事を行うことで、影響の低減を図ることとしています。</p>
	<p>・種類によっては縄張りを必要とするものもいる。縄張りや営巣場所そのものやその周辺では餌密度等をめぐるもの等、様々である。ところが、本準備書はそれらについて一言も触れていない。</p>	<p>生態系の予測については、地域の生態系を代表すると考えられるカンムリワシやセッカについて、営巣地や行動圏、採餌場所、繁殖期の縄張り、産卵場所・生息場所の環境条件等の詳細な調査を実施し、予測を実施しました。</p> <p>陸上動物の予測については、事業実施区域周辺の個体群の維持を目標として環境保全措置の検討を行っており、種によっては繁殖率の低下及び営巣場所としての利用価値が下がる可能性があるものの、残存する生息環境への影響は小さいことなどから、事業実施区域周辺の個体群は維持されると予測しています。その上で、工事中は各々の種の繁殖に配慮し、繁殖期終了まで工事を行なわないこと、騒音低減の措置を講ずることなどの環境保全措置を講ずることとしています。</p> <p>なお、これら以外の種についても、3年間の調査で生息分布状況を把握しております。特に、営巣や産卵、集団ねぐらなどが確認された種もあり、p6-12-10～12の基盤環境生物群集として、環境類型区分ごとに整理し示しました。</p>
	<p>・海岸部への移動の際、「空港を迂回して海浜部へ降りることが可能」と書かれているが、これは唯の推測にすぎず、調査結果にもとづくものではない。根拠のない推測を重ねるのはやめるべきである。</p>	<p>オオナキオカヤドカリ、ムラサキオカヤドカリ、コムラサキオカヤドカリ、ナキオカヤドカリについては移動阻害は生じないものと考えています。また、事業実施区域内に生息するオカヤドカリ、ヤシガニについては工事前に海岸部へ移動させることから、移動阻害は生じないものと考えます。また、内陸部で確認されたオカヤドカリ及びヤシガニについては空港の構造として海と陸を分断するものではないことから、空港を迂回することは可能であり、着陸帯北側及び北側進入灯にはボックスカルバート及び水路が設置され海岸部への移動経路は確保されていることから影響は少ないものと考えています。</p>
	<p>・航空障害灯の影響についてはバナナ岳におけるコウモリその他の生物に対する影響調査はなく、生物の生活に対する阻害要因にははしないか心配。</p>	<p>航空障害灯は航空機から目視できることを目的として、樹木より高い位置に設置されるものであり、照射方向は上方であることから、ヤエヤマオオコウモリ等の生息環境である樹林地の林内への影響は小さいものと考えています。</p>